

病気を治すために病院に行ったのに、その雰囲気だけで疲れてしまった……。そんな経験をしたことはないでしょうか。日本は国民皆保険制度が敷かれ、原則としてどの病院にもかかることができま。そして、平均寿命は世界一です。しかし、その陰で犠牲にしてきたもの——それが、冒頭で述べた、えも言われぬ「病院の雰囲気」なのかもしれません。

では、それを生み出すものは何なのか。端的に言えば、「ムダ」が許されない場所になってしまっているということだと私は考えています。一つには、人員のムダが許されないことです。病院のスタッフはいつも忙しそうです。自

て大切なものを提供してはもらえない。残念ながら、これが現在の日本の多くの病院で起っていることです。現場の方々は身を粉にしてそれぞれの役割に奮闘していますので、これは政策が生み出してしまった構造と言えるでしょう。

このような現状に対して、挑戦が始まっています。ホスピタルアートという言葉聞いたことがありますか？ 病院にさまざまな芸術の要素を取り入れ、人間らしい医療を取り戻そうという試みです。もともと、古代社会の病院は、貧しい人や旅人を癒すために、教会が中心となって興したものでしたから、絵画や彫刻、ステンドグラスなどがあるのは当たり前のことでした。ある意味、原点回帰と言えるかもしれません。

大阪にある病院では、「病院はもっと社会に開かれたものであるべきでは？」という問題意識を持っていったことから、2015年の新病院建設を機に、大胆にアー



写真1 耳原総合病院による朗読劇「木を植えた男」

トを取り入れていきます。壁画やレリーフを飾るだけでなく、さまざまな企画展を実施したり、隣接するホールで朗読劇の公演をしたり（写真1）。最初は抵抗感を見せていた方々にも今ではすっかり受け入れられ、病院に新しい風を吹き込んでいくようです。

そして、病院に来て、一人静かに和みたい、時には涙を流したいと感じたことはありませんか？ 北海道にある病院では、木のベンチやテーブル、図書館やギャラリー、カフェといった、ムダに見えるかもしれない空間をあえてつくっています（写真2）。このような空間をつくったからといって、診療報酬が得られるわけではありません。ですが、患者も一人の人間らしく存在しているというメッセージが伝わってきます。

私たちは、「今」という時間が点で存在しているわけではなく、長い人生の道のりを経て、ここにたどり着いています。こんな仕事をして、こんな家族がいて、こんな趣味があつて……。全てが自分なのです。当然、病気が怪我をしたことにも、文脈があります。重い病気になるといことは、ある種の人生の分断を経験することです。それをつなぎ合わせて、一つの人生を取り戻す作用が、アートにはあります。また、病



写真2 製鉄記念室蘭病院のフリースペース

の心配事で狭くなっていた視野に、ひとすじの風を吹かせ、新しい世界観をも与えてくれるでしょう。そういった、科学としての医療それ自体とは関係のない、ムダ、遊び心、余白のようなものが、緊張をほぐし、呼吸を楽にします。そして、誰かを思いやる心のゆとりも生み出すでしょう。それは、患者さんにとっても、そこで働く人にとっても、大切なことではないでしょうか。

# 研究最前線

THE FRONT LINE OF RESEARCH

経営学部

## 人を癒すことの意味とは？



PROFILE

早川 佐知子  
HAYAKAWA Sachiko  
経営学部准教授

1977年 山梨県生まれ  
2013年 明治大学大学院経営学研究科博士後期課程修了 博士（経営学）  
同年 広島国際大学医療経営学部講師  
2019年から現職

主な著書・論文  
『アメリカの看護師と派遣労働 その歴史と特殊性』（溪水社・2015年）

所属学会  
労務理論学会、日本医療福祉政策学会、社会政策学会、日本経営学会、労働社会学会、過労死防止学会

分が困っていることや辛いことをじっくり聞いてもらうのは気が引けてしまいますね。実は、話を聞いてもらい、心を寄せてもらうことは、何よりの薬なのですが。もう一つは、空間や機能としてのムダも許されないということなんです。日常、私たちが生きている空間は、ムダだけなぜか愛お

いものに囲まれていませんか？ですが、病院の空間は、まるでそういった遊び心が存在してはいけな。他愛のないコミュニケーションや、心安らぐ空間。こういったものが、本来、人間には欠かせないのです。病院へ行くのは最も身体や心がつらい時なのに、人間とし